

⑳ 身近の自然を楽しむ 早春賦「春は名のみ」の今

Enjoy the surrounding nature: The present of "SOSHUN FU (Spring is only in name)

2/23/2023

吉野輝雄

今、日の出時刻や気温の変化、そして周囲の植物に目を向けると、「早春賦」の歌詞「春は名のみ」の時期にある事を実感する。

作詞：吉丸一昌、作曲：中田章

春は名のみ 風の寒さや  
谷のうぐいす 歌は思えど  
時にあらずと 声もたてず  
時にあらずと 声もたてず

カワズザクラは、伊豆の河津では満開だそうだが、芦花公園でも同じだ。カメラを向けていると小鳥が3羽飛んで来て花を摘まんでいた。早春賦の歌詞のようにウグイス(鶯)かと思ったが、メジロ(目白)であった。

立春(2/4)から20日も過ぎた今、日の出は6時20分近くになり、ラジオ体操の時は随分と明るくなっ

た。気温が氷点下になることは少なくなったが、園内と近隣の草花はまだ蕾みを閉じていて、名ばかりの立春が春の風となって感じられるのが待ちどろしいこの頃だ。

しかし、そんな中で春を待ちきれない草花たちがいた。

レンテンローズ(レント=受難節/今年は2/22から)、コブシ(辛夷=赤ん坊がこぶしを広げた様)、フキノトウ(薑トウが立つ前)。菜の花(春を味わってと霜畑に茎を伸ばし花まで咲かす)。ジンチョウゲ(甘い香りで春を告げようとしている)、ミモザ(黄色の小さな花を丸く房状に咲かせて春を華やかにする)、オーストラリアを代表する花であると朝の体操に参加していた女性から聞いた。)

その他に例年通りであるが、立春後に花を開かせる草木がある。

椿の一種であるワビスケ(侘助、その中の一つがタロウカジャ(太郎冠者))。今年是一段と華やかに咲き揃い、目を惹いた。深紅のボケ(木瓜)の花がきりりと咲いている。アシビ(馬酔木)は先ずレンガ色の蕾みが数珠のように垂れ下がり、白い鈴なり状の花に変わっていく。

オウバイ(黄梅)は、中国原産で「迎春花」と呼ばれ、まさに立春の花。しかし、白梅、紅梅とは違うジャスミン属の半つる状の木(ネット情報より)。ムスカリは、ギリシア語のムスク(ジャコウ=麝香)に由来するブドウの実のような花。ブドウヒアシンスとも呼ばれる。

最後に季節の変化を超越しているかのような不思議な花との出会い。

一つは、シクラメンの一種で全身赤紫色。何と12月半ばから今まで花が萎れず、原型(外観)が2ヶ月以上変わらない、ミステリーだ!造花かと思ひ手で触ったが、生きた植物である事が分かった。

もう一つは、秋10月に咲く芦花公園内のギンモクセイ(銀木犀)が2月に花を咲かせたことだ。一種の狂い(二度)咲きか?別の場所の銀木犀だが、何と、グリーンの実をつけていた。因みに、金木犀は、2月には花も実もつけていない。

冬の間は、花の種類が少ないが、よくよく観察するとユニークな草木の花々に出会える。季節の変わり目は楽しい!